

Zero Sum Short Stories

零和短編集

14

いくさば

竿姫戦場磔



陽根篇

濠門長恭

目次

身代露見	二
苛烈拷責	一六
竿姫淫惨	三三
戦場磔晒	六六
後書き	七八

身代露見

「遠慮なさいますな。いえ、姫様おんみずからのお手をわずらわせては、われらの面目が立ちませぬ」

帯に手をかけられて、三日目にして早くも露見するのかと、梅丸は覚悟を決めざるを得なかった。

姉姫の身代りとして弟を差し出すなど、元より事が成ろうはずもないのだ。

領主である馬手良実^{めてよしざね}への挨拶は、響声破笛丸^{きようせいはいてきがん}で調えた喉からにわか覚えの鼻へ抜ける裏声で切り抜けたものの、国から伴った侍女を退けられ、見張を兼ねた女人を付けられては——昨日の一日だけでも誤魔化しおおせたのは上首尾であらう。

衣服を剥ぎ取られて、晒布を幾重にも巻いた胸が露わになる。風呂を使うのであれば、当然にその布も解かれる。

「ま……」

名目は侍女頭のサチが戸惑いの声を漏らした。

腰巻も取り去られて、きつく締めこんだ褌も女人の目に曝される。

「姫様は月の不浄でございましたか。それならば風呂は取りやめねば」

経血を塞ぐために男の褌に似た布を着ける者は少なくない。しかし当然ながら、梅丸の股間の布には、一点の赤染みもなかった。

「御無礼のほどを……」

サチが梅丸の股間へ手を伸ばして——驚愕の表情になった。慌てて梅丸から身を引いて、大声で呼ばれる。

「お出会いくだされ、曲者です」

たちまちに二人の郎党が押取り刀で風呂上がりの間へ飛びこんでくる。が、何の変事もないように見えて、目のやり場に困惑する。

「この者は松姫様ではありません。あろうことか、男です」

サチの申し立てに、今度こそ大騒ぎとなった。

たちまちに梅丸はねじ伏せられた。さらに三人が風呂上りの間へ駆けつけて、ついには領主までが小姓を従えて姿を現わす。

上がりの間は犇めいて、三人の侍女は追い出され、それでもなお狭い。こんなところで詮議もなるまいと、梅丸は然るべき場所へと、禪一本の裸身で片腕を後ろに拉がれて連れ去られた。

然るべき場所。大きめの館に小川ほどの堀を巡らせた陶分城すえわけに比べれば、縄引で倍する泥科城どろしな。郭内に牢獄もあれば責問せめといの土間もある。

梅丸は、その責問の場へ引き据えられた。裸形を高手小手に縛され、二の腕と胸にも縄を掛けられて。三角の柱を寝かせて敷き詰めたような十露盤責の座へ正座させられる。

天上の滑車から垂れた鉄鎖や部屋の一画に立てられた梁を支えぬ柱、作り酒屋が仕込みにも使おうかという巨大な樽や、横に寝かせて四本の脚で宙に浮いた辺二尺はあろうかという三角の柱。そういったおどろおどろしい調度に囲まれて、早くも脛に食いこむ稜線

の痛みに顔をゆがめる女髪に結った美童。これもまた、一幅の無惨絵巻であらうか。

「うぬは何奴じや。何のつもりで松江姫に化けた。国から伴った侍女どもは承知の上か。

そもそも、国嶺正雀くにみねしょうじゃくの謀りごとか。有り体に白状せぬとあれば、痛い目に遭わせてくれようぞ」

矢継ぎ早に浴びせられかけて、何からどのように白状するかと、戸惑う梅丸。もはやこの場に及んでは、隠し立ても言い逃れもできぬと、腹を括っている。いや、そもそも。たとえ実父の命とはいえ、姉のためとはいえ、ひいては国嶺の家門を守るためとはいえ、そこまで忠義を尽くす謂れなど無いと、実のところは思っている。国嶺の家が減ぼうが、養家を取り潰されようが、梅丸の知ったことではない。

しかし馬手良実は、梅丸の戸惑いを逡巡と受け取った。

「載せろ」

主君の短い下知に従って、二人の郎党が脇に積んである畳の半分ほどの石板を一枚抱え上げて、梅丸の腿に載せた。

「ぐうう……痛い」

梅丸が呻く。

三角材の稜線が脛に食いこんでいる。

「素直に吐かねば、二枚三枚と重ねてくれるぞ。五枚も積みば脛が碎けて、足萎えになると知れい」

当主みずからが吟味にあたるその声は、妙に喉に絡まっていた。

また殿様の悪い虫が頭をもたげた——と、眉をひそめる家臣もいた。それにしても、乙

女ばかりでなく美童にまで。

もちろん、梅丸は隣国の当主の嗜癖など知らぬ。

「何もかも話します。どうか、この石を除けてください」

「そうか。もう一枚所望するか」

二枚目の石板が重ねられた。

ゴトリ……

「あがあつつつ……」

梅丸は口を大きく開けて、悲鳴が喉につかえている。じわりと、顔にも肩にも背中にも脂汗がにじむ。

「わ、わたくしは……松江姫の、畜生腹の、弟でございます」

喘ぐように、一言ずつを絞り出した。

言うに事欠いて畜生腹などとは、偽言にしては突拍子もなさすぎる。当主は、そこに真実を見たのだろう。

「石を降ろしてやれ」

激痛から解き放たれて、はあはあと梅丸は肩で息をした。

「先を話せ。言葉を惜しむなら、三枚を載せてやるぞ」

「わたくしは紛れもなく、場更郷ばさらの領主、国嶺正雀の実子にございます。生まれてすぐに、

三田の家へ養子に出されました」

何をどう白状するか考えあぐねて、梅丸は出生から今日に至るまでを、すべて語ると決めた。しかし、のっけから当主の疑念を誘った。

「異なことを。畜生腹であつたとしても、男女なら捨てられるのは、女の方であろう」

「わたくしはあまりにもひ弱で、とても育ちおおせるとは思えなかつたと、養親から聞いております」

血筋とは、すなわち男系に限られる。そして家門の存続が第一の武家にあつてみれば、まさに馬手良実の言う通りなのであるが。それほどに出生当時の梅丸は未熟児であつたのだろう。

それは今にも尾を引いて、同年輩の青年はもちろん女人よりも華奢に見える。嫡子として養育されていれば、この数年のうちには甲冑に身を固め若大将として初陣を飾る——その姿など、想像もつかぬ。

養子を賜つた三田家も、梅丸の扱いには戸惑つたことであろう。はつきりと捨てられた子を大切にしては、主君へのあてつけと取られかねない。しかし死なせてしまつても、あるいは勘気をこうむるのではなからうか。

つまるところ梅丸は、飢えさせられたりはしないものの、捨て置かれたのだ。

たとえば、姉でもあり雲の上の存在でもある松は昨年のように髪を上げ裳着の祝も済ませて名を松江と改めているのに、梅丸は元服どころか、そもそも髻も結ってもらえず総髪のままに捨て置かれていた。それが、女に化けるのには好都合だったのだから、とんでもない皮肉ではあつた。

——この秋に、陶分城が攻められた。^{あき}

つまびらかにいえば、先に国嶺勢が領地の切り取りを目論んで中里郷に攻め入つたものの、現代でいうところの遅滞戦術に翻弄され、手薄になった城を、逆に馬手良実の主力に

攻囲されたのである。驚いた国嶺勢は大急ぎで取って返したものの城には入れず、野戦が必至の形になった。

対峙する兵数は二百対三百で国嶺勢が不利。しかも、泥科城からの追い討ちが百。しかし、陶分城にも五十の兵がある。双方が腹背に敵を迎えて戦えば、数の多い側が勝つにせよ、攻城戦を凌ぐほどに兵を損じるであらう。

そこで、強者側の馬手から和議が持ちかけられた。とはいえ、互いに領地を安堵するという一条を除けば、国嶺側の降伏にも等しい。国嶺からは嗣子を入質に差し出すが、馬手からは無しというものだった。もつとも、松江姫が次の領主になれるはずもなく、迎える婿が跡を襲う。つまり家女（かじよ家付女の謂）である。

この条件は、一方的に嗣子を入質に取るという以上に重い意味を持っているのだが、それは後段で明らかとなるので、今は語らない。

かくして、三田家の郎党にさえ、どこの馬の骨とも知れぬ——と思われていた梅丸が、表舞台に引き出されたのである。生贄として。

単に身代りということであれば、適当な娘を見繕えば済むのであるが。似顔絵はともかく、目鼻立ちくらいは領民に知られている。間者を通じて他国にも伝わっているであらう。

そして梅丸は。男女の違いはあれど、双子だけあって、それなりに顔立ちが似かよっていたのだった。

梅丸の否応など齒牙にも掛けられない。松江姫の身代りを実父から命じられ、女の所作を付焼刃されて。

すでに声変わりをしているとはいえ、華奢な身体つきにふさわしく声は高目で、戦場いくさばで

のおらび声など鍛錬したこともない。鼻に抜けるように意識して裏声を使えば、女声に聞こえぬでもない。そして。遠国の井置いおきから婿を迎える松江姫のために、菓の三層倍の目方の黄金で購った明みんから渡来わたりの驚声破笛丸で朝晩に喉を潤せば、その声を男と疑う者などおるまい。

身のまわりの世話をするのが当方より伴った侍女であれば、敵方に肌を曝すこともなからう——という思惑は、あつさりあつさりと覆ったのであるが。

馬手良実も男であれば、いずれは手つかずの花を散らそうとするやも知れぬが、それはそれで千載一遇。おまえの正体を知って驚愕きやうがくしているうちに寝首を搔かいてしまえと。渡されたのが、鋼仕立ての簪。

この密命ひみつめいを、梅丸は本気で信じている。高貴な女人は臥所でも髪を飾るのだと、野良育ち同然の少年は疑わなかった。

国嶺正雀にしてみれば、忌まわしい我が子がどうなろうと知ったことではない。馬手に一旦は兵を退かせて、さらに十日も日を稼いでくれれば、それで上首尾なのだった。

梅丸の、いわば身の上話を聞き終えて。良実はしばらく、梅丸の顔といわず体軀といわず、無言で睨めまわしていた。

そして、試すように問いかける。

「このような不実が露見すれば、和議は反故になる。我も城を攻めようとは思わぬが、領地を半分も切り取ってくれよう。それを分かちておるのか」

戦いくさや政まつりごとなど、梅丸には分からない。まして、領主の心裡など。

「わたくしは、何も聞かされておりません」

寝首を掻けと命じられた一点だけは、隠し通さねばならない。

「何も聞かずに、のこのこと乗りこんで来たと言っても言うつもりかッ」

良実が大音声で威しつけた。

「……………」

まさしくその通りなのだ。いや、言外に——露見は必定。そのときは殺されてしまえという冷酷無慈悲を、梅丸は実父の言葉の裏に聞き取っていた。

それでもなお。逆らってその場で殺されるよりはと、命に服さねばならなかった。

そのような事どもまで打ち明けるのは、さすがに恥辱であつた。となれば、黙するしかない。

「そうか。ならば問答は不要じゃ」

良実が吐き捨てた。

「者ども、夜も更けてきた。下がって良いぞ」

犇めいていた家臣のほとんどを去らせたが、自身は側近の小姓共々残った。他に、頬に刀傷を刻んだ武将と思しき威丈夫と、梅丸とさして背丈の違わぬ小男。といつても、胸板も腕も腿も相当に分厚い。

「いつもの顔ぶれじゃな」

良実が曖昧につぶやいて、ニタリと嗤った。

「本格の責は明日にして、今日は手ほどきをしておいてやるか」

一体にこの御仁は何を言っているのかと戸惑ううちに、小男に背後から突き飛ばされて、

石畳の上へ顔から倒れこんだ——ところを、胸をもう一人の男の足の甲で受け止められた。そのまま俯せに転がされて。血こそ流れていないものの、脛には三角の窪みが梯子段のように刻まれている。とてもことに立ち上がれるものではない。

梅丸の足首に左右別々の縄が巻きつけられ、右足の縄が天井の滑車から垂れている鎖につながれた。

「よいやさ」

滑車で折り返している鎖の端を、二人の男が息を合わせて引くと——梅丸の身体は軽々と宙に浮いた。軽々とは見た目のことで。宙吊りにされた梅丸の身体の重みは、すべて右脚にかかっている。当人には、相当の苦痛だった。

しかも頭に血が下がって、鼻に内側からの圧迫が、これも梅丸を苦しめる。

梅丸の腰が小男の顔の高さに達したところで、鎖が壁の鉤につなぎ留められた。折り曲げていた左足の縄が横に引かれて、これは鎖と反対側の壁につながれた。

両足を大きく逆八の字に開かされ、後ろ手に縛された逆さ吊り。

「ここまで裸になっておるのだ。最後の一枚も取り去ってやるのが慈悲であろう」

良実が嗤い含みながら下知すると、武将の風格がある方の男が、脇差を抜いて禪を切り解いた。

たちまちに、少年の股間が露わになる。

「なるほど。これならば、女に化けるのも容易いかもしれんな」

何を思ったか。良実が梅丸の後ろから股間へ手を伸ばして、縮み返っている魔羅を摘まんだ。淫囊ふぐりの中へ埋めこむようにして後ろへ強く引っ張ると、少年の股間は——淫裂にし

ては太い溝と、これほどの厚みを持つ女性も珍しくはないくらい淫戸（大陰唇の謂）と見紛う形に変じた。つまり、それほど男としての道具がみすばらしかった。

良実は、魔羅も淫囊もひとつかみにして、餅をこねるように指を動かした。

「……………」

梅丸は戸惑っている。時と場が違えば、男として辱められていると憤るところだが、人質の身代りとして入りこんだ（姫の双子の弟と称している）曲者を吟味するにしては、あまりに意外な仕打ちだった。それは、良実とて承知しているのだろう。

「戯れはこれまでじゃ。強情を張っておるとどうなるか、ちつとばかし教えてくれよう」

良実は梅丸の正面にまわって、小男に向かって手を伸ばした。小男が、弦を張っていない半弓を恭しく差し出す。それを手に取って。

ぶんッ

素振りをくれた。

「拙者は、これにいたす」

長さ三尺ばかりの荒縄を四、五本も束ねたものを手にして、武将が梅丸の後ろへまわった。

「乾いたままでは、ちと手ぬるいが」

二人がかりで前後から打ち敲こうというのだ。

「責問はお許しください。本当に、ただ姫様の身代りになれと、それしか命じられていないのです」

もちろん、誰も聞く耳は持たない。

「リヨウイよ。女子おなこなれば、揺らすのには乳首じゃが。こやつのは小さいのう」

「されば、それがしに思案がございます」

小男が答えた。この男、いちおうは士分しぶんで、名を当塚亮威とうづかりやういという。ちなみに武将風情の方はれっきとした侍大将で、名は辺延野茂兵衛へんのものへい。二人とも、主君みずからが若い女子の責問あるいは折監を致すときはお相伴、違った、お手伝いをしている。

小男の当塚は細引紐を持つてきて、それを梅丸の股間に巻きつけた。

淫褻と魔羅をひとまとめにきつく締めあげられて梅丸は、痛みよりも恥辱を強く感じた。

小男が良実の後ろに離れて立って、細引紐をじわっと引いた。

「……………」

不快が強まっただけで、梅丸は呻きも漏らさない。

梅丸の身体が前へ振れると、すぐに当塚は緩める。揺れ戻したところで、揺れの速さに合わせて、今度は強く引く。五度も繰り返すと、梅丸の裸身は大きく揺れだした。

正面に立つ良実の股座に顔が触れんばかりに迫ったとき。

ぐぼっ……弓の端が梅丸の腹に、突き刺さったとしか見えない。

「うべえっ……」

ぐぐもった呻き声を噴く梅丸。振子の勢いに弓で突いた力が合わさって、いっそう大きく後ろへ振れた——ところへ。

ぱしいん……辺延野の縄束が背中に叩きつけられた。

「んぐ……」

痛みは強かったが、胃の腑を抉られる重い苦痛はなかった。

裸身が再び良実に向かつて振れる。

ばしん……弓が水平に腹へ食いこんだ。

「ぐぶつつ……」

突き入れられるよりは、まだしも耐えやすかった。

当塚が引かなくとも、裸身は揺れ続ける。それに合わせて半弓と縄束が叩きつけられる。

五回に一回くらいは胃の腑を挟られる。

赦しを乞うても無駄と、梅丸は悟っている。それでもなお訴えるのは、さすがに無様だと、一寸の虫にも五分の矜持は残っていた。

背中是一片に赤く染まり蚯蚓腫れが走り、腹は赤紫の痣に埋め尽くされて。ようやくに、二人が手を休めた。

辺延野は縄束を投げ捨ててもろ肌脱ぎになって汗を拭っているが。良実はまだ半弓を手に、梅丸の揺れを見定めている風情。その手が不意に動いて。

ぴしりっ……音は小さかったが、真上から股間を打ち据えた。

「うぎやあつつ……」

ひと声大きく叫んで、梅丸の裸身が一寸ほども伸びたように見えた。気を失って弛緩したのである。

「ふん。他愛もない。裏干物うらひものにしておけ」

梅丸は、いったん土間へ降ろされた。手足を大の字に広げられて、両手首にも縄がつながれた。辺延野が梅丸を俯せにして持ち上げる。

「弥太郎殿に手伝わせてもよろしいか」

「弥太、助けてやれ」
す
た
ち
ひ
さ
や
た
ろ
う

館久弥太郎は主君の小姓であるから、若輩といえど直の指図は憚られる。

弥太郎が手首の縄を、当塚が足首の縄を受け持つて、それぞれが壁の鈎に縄を絡めた。

「よいやさあ」

折り返した縄を二人が息を合わせて引くと、梅丸の四肢がぴんと引き伸ばされて。辺延野が手を放せば、傷だらけの裸身が宙に浮いた。

「さて、明日は一刻ばかり早起きをするか」

「それほどに、この餓鬼がお氣に召しましたか」

辺延野が苦笑する。

「そろそろ、奥にかまつてやらんとな。昼には、こやつを見破ったサチに褒美をやるしのお」

「ははあ。では、朝は放ちませんので」

「鉄砲と同じじゃ。弾籠めには手間がかかるわい」

主従は馬鹿話に興じながら、意識を失つて水平の宙吊りにされている梅丸を責問の間へ置き去りにしたのだった。

ほどなくして梅丸は息を吹き返した。

すでに夜半も近い。格子窓から流れこむ神無月の夜気は、肌に突き刺さるほどに冷たい。

このまま殺されるのだろうと、梅丸は絶望に墜ちた。姫の実の弟であろうと、身分を偽ったことに変わりはない。馬手家から見れば、間者である。馬手が国嶺を攻めるに足る口

実になる。

ならば、暗殺の密命も白状してしまおうか。何か隠し事をしてしていると疑われているのだから、白状すればさらなる責問は免れるのではなからうか。

いや……と、思い直す。領主の命を狙った者への処刑は、ただの死罪ではない。火刑が地獄なら斬首は極楽。そんな言葉を耳にしたことがある。その地獄よりも無惨なのが、鋸引であり車裂くるまさきという。

どれだけ打ち敲かれても白状せずに責め殺される方が、よほど安楽ではなからうか。

「……くしゅんっ」

くしやみをして、はっと下半身を引き締めた。漏らしかけたのだ。

夜が明ければ、誰かが様子を見に来るだろうが、それまでもつかどうか。

この場には床板がなく、地べたが剥き出しになっている。流血にしても失禁にしても跡始末が手っ取り早い。気絶した者に容赦なく水をぶっ掛けられる。

いっそ放尿してしまおうかと思案して、やはり我慢を選んだ。漏らせば、からかわれるのは目に見えている。それもまた、一寸の虫にも五分の矜持を削り取られる。

しかし尿意は、責問で受けた傷の痛みと旦夕に迫った死の恐怖から、梅丸を幾分かでも遠ざけてくれた。下腹部を引き締める方へ意識が集中したのだ。

——梅丸の努力は報われて、尿意を堪え切ったままで、明け六つの鐘を聞いた。一睡もしていなかったが、眠気を感じるどころではなかった。

苛烈拷責

観音開きの分厚い木戸が開いて、どこどかと足音荒く入って来たのは、馬手良実ひとりだった。その後ろから、小姓の館久弥太郎と三人のうら若き女性によしやうが、しずしずと足を運び入れる。

女性にょせいは、馬手家で用意した松江姫付きの侍女だった。筆頭は、すでに登場しているサチ。やや若い二人はデンとスイである。幸、伝、粹の字を宛てる。決してサディスチンと並べ替えないように願う。

松江姫その実は梅丸に付き従って来た元の侍女たちは、良実から家臣どもに下賜されて、それぞれに女ならではの数奇を辿るのであるが、それについては割愛する。

これから厳しい責問を始めようというには、奇妙な顔ぶれであった。いつそう奇妙なことに、俯せの大の字に吊られている梅丸を囲んだのは、三人の女性であった。良実はやや離れて床几に座を占めて、小姓はその後ろに片膝突きで侍している。

「そうは時をやれぬぞ。半刻で干乾びさせられるか」

良実がにたにたと嗤えば、サチも口を手でおおいながら声に出して笑う。

「おまかせください。どうせ、筆下ろしも済んでいないでしょう。赤子の手ほどにもひねり甲斐のない魔羅……今のは聞かなかったことにしてくださいませ」

下賤の身とはいえ女子おなごであつてみれば、魔羅だの縫処ほとだの、ことに殿方の前で口にして

良い言葉ではない。

梅丸の淫部には、根元に細引紐が巻きつけられたままになっている。サチが、これに目を付けた。

「なんじゃ。朝勃ちもしておらぬか。若いくせに、だらしない」

ゆばりも溜まっておろうにと嘲る。朝勃ちと尿意は関係ないのであるが、女の身としては分からねことであろう。

魔羅という言葉をお口にすることを恥ずかしがるくせに。サチは平然と梅丸の股間に手を差し入れて紐を解いた。改めて、それで魔羅の根元を幾重にもぎりりと締めあげた。

「……………」

何をされるのかと怯えて、梅丸の股間がいつそう縮こまる。そこを強く蹴られると、ふぐりが破裂して悶え死ぬと耳にした覚えがある。

しかし、それにしても様子がおかしい。

「どうじゃ、デン。一番槍……は、男か。その槍をへし折ってみるかや」

うなずいて、デンがサチと場を替わった。袖を絡げて襷掛け。

「へし折るには、まず槍にせねばなりません」

サチと同じく、平然と梅丸の男を握った。慣れた手つきで竿をしごき始めた。サチよりも若くは見えるが、デンもとつくに年増と呼ばれる年頃である。逸物の扱いにも慣れていよう。

しかし。デンが手の動きを速めても、梅丸は一向に奮い立たない。それは、そうだろう。命の瀬戸際である。戦場では豪胆の武士でも竿は縮みあがり淫囊も股座にめりこむという。

チツとデンがはしたなくも舌打ちをした。

「手伝っておくれな」

声をかけられて、スイが梅丸の顔に身体を近づけた。

「これなら、どうだい」

前をはだけ、左手で梅丸の髪をつかんであおのかせ、そこへ乳房を押しつけた。

搗き立ての餅のような柔らかさと、艶めかしい香しさ。さすがに精通はしている男子であつてみれば、先の命よりも今の女。

たちまちにデンの右手からはみ出たのだが。

「くうう……」

細引紐が食いこんで、強い痛みを与える。怒張した魔羅は根元がくびれて、ちよつとひねれば茄子（にしては貧相だが）の如くもげ取れそうに見えた。

梅丸の苦悶にはお構いなしに、デンは魔羅をしごく。包皮を剥き下げて、ことさらに龟头を擦った。

「あ、あああつ……」

己の皮つるみでは決して得られぬ、めくるめく感覚の裡に魔羅が脈動したのだが。鈴口からは一滴の白濁も吐き出されなかった。

「い、痛い……」

細い管の根元を扼されていれば当然のこと。精を放てぬもどかしさと、堰き止められて今にも決壊しそうな激痛と。

「まだまだ苦しんどくれ。悶え抜いた後の快楽は格別ぞ」

空中に俯せの裸身へ手を差し伸べているのであれば、すでに赤黒く変じている亀頭の様子が、デンからは見えない。見えていたとしても、まったく萎えぬ魔羅に慈悲など掛けてやらなかったらうが。

決壊寸前の堤へさらに奔流を重ねるつもりか、デンは右手で亀頭に軽く爪を立てて煽りながら、左手で淫囊をくすぐったり指先で痛みを与えぬ程度に弾いたり。

梅丸は乳房の谷間に挟まれて、顔をそむけるどころか、息をするさえ苦しい。しかし、無理強い刺激による不本意な快感の方が、はるかに強い。

最初の大波が堰き止められて渦巻いているところへ、二つ目の大波が押し寄せる。

「頼む……出させてください」

くぐもった泣き声になって梅丸は懇願した。

「あんっ……」

スイが身悶えたのは、梅丸の唇と声に乳房をくすぐられたせいであろう。

「それが松江姫の物言いかッ」

不意に良実が怒号した。

「先日の甘い声は、どこへ失せた。男の如き物言いは、何としたことだ」

松江姫の身代りであるなら、いつ何時なんどきたりとも女として振る舞えと——無理難題を吹っかける。

「もう堪忍してください……」

梅丸はなんとか声を作って、にわか仕込よりもっと怪しい、日頃の耳にしてきた女言葉で赦しを乞うた。下女がせいぜいに取り繕った言葉遣いであるから、武家娘のそれではな

い。

しかし、それよりも。精を放ちたいなどと、女子が訴えるはずもないのだから、どのよう
に言うべきか、梅丸は言葉に詰まった。

「紐を、紐を解いてくだされ」

「願いを叶えてやれ」

意外に、良実が聞き届けてくれた。

「若いのじゃ。干乾びさせるには三回は出させねばなるまい。痛振り楽しんでおる暇はな
いぞ」

半刻のうちに三発を搾り取られるだけなら、精通を迎えて二歳と経たぬ少年であつてみ
れば、容易ではなくとも苦行でもあるまい。しかし、ひと抜きごとふたとせにこのような悪戯を施
されるとなると、責問にも等しいのではあるが。

「御意にございます」

デンは、両手で梅丸の男を縛り続ける。サチが反対側から手を差し入れて、付根を扼す
紐を緩めてやった——とたんに、爆裂の勢いで白濁が飛び散った。

「はあああ……」

一瞬の幸福感に包まれた梅丸だったが。白濁を噴いてひと呼吸の後。うなだれたとはい
え、さほど大きさは減じておらぬ、その魔羅の鈴口から。

じよろろろ……透明な水流が迸った。気づいて、三人が慌てて飛び退く。

「あッ……」

梅丸自身も気づいて下腹部を引き締めようとしたが、溜まりに溜まっていたゆばりは止

まらない。

「ほほほほ。寝小便かや」

空中で伏寝をしている形であれば、その謂いに間違いはないものの。梅丸を恥辱にまみれさせるには申し分のない揶揄であつた。剥き出しの地べたに、大きな水溜りが生じた。

「次は、あたいの番さね」

武家仕えの女房言葉を忘れて地のままに。胸をはだけたままのスイが水溜りを避けて梅丸に近づいた。裾を絡げてしゃがみ、緩めたばかりの細引紐を改めてぎりりと絞りあげた。だけでなく、十分な伸びしろを見こんで、ヒモの端で亀頭の付根の溝を、これもぎりりと縛つた。

つまり、大波を堰き止める堤が二重になつた。

「このまま擦っちゃ、可哀想さね」

スイは梅丸の眼前で、掌と指におのれの唾をたつぷりと塗した。

その指で亀頭をつままれ、掌で淫囊を蹴られると——たちまちに、怒張する。魔羅を女子の唾で濡らされるというそのことが、いまだ媾合いを知らぬ少年を著しく興奮させたのだ。

「おやあ、ずいぶんと元気じゃねえ」

早速にしごき始める。亀頭のくびれ即ち雁首を扼す紐に阻まれて、包皮はたくれたまま。それだけ刺激が強い。強過ぎてかえつて性感を妨げられる場合もあるが、射精直後の虚脱から呼び戻すのは、これくらいでちょうどよからう。

亀頭がひりひりと痛むのを感じながらも、梅丸の内心とは関係無く、竿は太く硬くなつ

てゆく。根元と先端を締めあげられているので、赤黒く変じた亀頭と紫色に染まった魔羅竿は、茄子の尻に笠を開いた松茸そのもの。

「くう……」

精を放って四半刻ときと経たぬというのに、凄まじい衝動に襲われた。スイの指がそれほどに達者というよりは、女人の唾のせいであろうか——女は子宮で欲情し男は頭で勃起すると後世に謂う。

怒張すればするほど、魔羅をきつく締めつけられる。根元はまだしも、雁首には細引紐が食いこんで、その上を激しく擦られるのだから、擦り傷になって血が滲む。

「あう……痛い。堪忍してください」

「何を堪忍してほしいのかな」

スイではなく良実が尋ねる。

「……手を動かさないでください。紐を解いてください」

なんとか女言葉に似せて声も作ったが。

「何の紐かな」

「魔羅を縛っている紐を……」

「たわけッ」

良実が大声で嗤う。

「女子の身に、魔羅などあろうはずがない」

女子として振る舞えと無理難題を吹っ掛けたのは、このようにして騷るつもりが、最初からあったのだと——梅丸も悟った。

「また……隠しどころを虐めるのは、堪忍してください」

股座と言いかけて、慎み深い女人は決して言わぬだろうと気づき、下女の誰かが言うのを耳にしたうろ覚えに言い直した。

もちろん。良実は面白がるだけで、スイを制止などしない。どころか。

「松江姫が苦しんでおるぞ。早く楽にしてやれ」

これは、けしかける言葉だった。

「御意にございます」

スイの手の動きが速まった。

「くうう……痛い」

半泣きの声で梅丸は訴えるが、魔羅はますます硬く龟头は破裂しそうなほどに膨れている。

「ああっ……」

梅丸の全身がびくびくつと震えて。しかし当然ながら、一滴の白濁も零れない。

「くうう……紐を緩めてください」

「おやおや」

スイはしごく手を止めて。わずかに垂れている紐の端をさらにくびれへ巻きつける。そして両手を使って絞りあげた。

「きひいい……」

傷ついていた裏筋に血が滲む。

「これで気が紛れよう。もちつと愉しませてやるよ」

さすがに。いくら刺激が強くても、痛みが快感を上回っていては、射精には至らない。スィは体勢を変えて、また乳房の谷間で梅丸の顔を挟んだ。

「ほおら。これで逝っちまいな」

これまでとは打って変わって、羽毛でくすぐるような愛撫。同時に、サチが紐を緩めた。

「ああああっ……」

びゅくびゅくつと魔羅が脈動して、先と同じほど激しく白濁が飛び散ったのだが。此度はたちまちに萎縮した。

スィが下がり、梅丸の横にはサチが進んだのだが。

「最後はあたしですけど……こんなフニヤチンは、見たこともないです」

その言葉に、良実も小姓も失笑する。

「ならば、縛るのは堪忍してやっては如何でしょう」

デンの助け舟は、むしろ板子をぶち破るようなものだった。海綿体から静脈への還流を遮ればこそその強制勃起である。しかも。

「これで血止めをしてやれとの仰せです」

主君の命を受けて小姓が、壁に設えられた棚から大ぶりの壺を取って来た。中には白い粉がぎっしり。傷に塩を塗るのは、手当ではなく責問である。

たちまちに魔羅は白く変じて、亀頭のあたりは薄赤く染まった。それをしごきあげるのだから。

「ひいひいっつ、痛いいたい。やめろ、いえ、堪忍してください」

声を作るゆとりまではなくとも、まだ女言葉を使おうとするあたり、梅丸の性根も大し

たものだった。もともと、責の限界を見定める目安に使われるとは——気づくはずもないのだが。

華奢な美童の悲鳴は年増女の嗜虐を煽るだけ。小さな掌に握りこまれた魔羅と淫囊は、もはや奮い勃たせるのではなく痛めつける為だけに、捏ねくりまわされ爪を立てられ引つ搔かれている。

あまりの激痛に、梅丸は悶絶さえできなかった。

「それまでじゃ。三発目を放てぬとは不甲斐ない餓鬼だのう」

この助け舟は良実だった。もちろん、舟に引き揚げるのではなく、重しを括りつけて文字どおり水底に投げこむためではあったが。

三人の侍女（というか、女ならではの責問役というか）が退出して程なく、昨日の二人、辺延野茂兵衛と当塚亮威が姿を現わした。役務の途中だったか、きちんと袴を着けてかしくまった装束だった。

梅丸は手足の縄を緩められて、土間へ俯せに降ろされた。身を起こすはおろか、顔を上げるもできない。

それでも容赦なく後ろ手にねじりあげられて、厳しく縄打たれた。それから仰向けに蹴り転がされて。あたかも搾精責の続き。今度は二本に重ねた細引紐で亀頭のくびれを、大の男の両手の力でぎりぎりと縛られた。そこへ百成瓢箪の瓠ふくべが括りつけられた。胴回りは一尺、高さは八寸と、かなり大振りである。酒も五、六合は入れられよう。

「ふむ、ちと物足りぬか」

淫囊の根元にも、こちらは緩めに二重の細引紐が巻かれて、同じような百成瓢箪がつながれた。

その一方で、十露盤責に使われた石板をざっくり三つに割った（割れたのだろう）物が胸板に置かれて、腋の下をくぐらせた縄でしっかりと結わえつけられた。

そうしておいて。両足を揃えて縛って、滑車から垂れる鎖で逆さ吊りにされた——のだが、昨日の滑車とは違い、大の男の胸倉あたりまではあろうかという巨大な樽の真上に設えられている滑車だった。梅丸は裸身を樽の胴に擦られながら、樽の真上すなわち満々と湛えられた水の上に吊り下げられた。

二つの瓢箪が性器を——逆さ吊りだから、頭へ向かって引つ張る。しかし、瓢箪は空なので、たいした痛みではないのだが。

裸身の揺れが治まったところで、辺延野と当塚が息を合わせて鎖をゆっくりと緩めていく。

「よいやさ」

梅丸は頭から水に浸けられていく。

このまま溺れ死にさせられるのではないかという恐怖に駆られながら、梅丸は息を止め目もつむって——されるがままになっているより他はない。

鼻に水が入ってきて、ツウンと頭の奥に鋭い痛みが生じた。本能的に鼻から息を吹いて、痛みを抑えた。

顔だけでなく、膝頭のあたりまでが水中に没した。

「……………」

亀頭と淫囊に生じた違和な痛みに、梅丸は悶えた。瓢箪が浮かび上がるようにして、強く引っ張っているのだ。

六合の酒が入るなら、その重みと同じ力で引っ張られる。傷ついている雁首には、まずまず細引が食いこみ、淫囊では睾丸が締めつけられる。

ぶくぶくと泡が水面に浮かぶのは、痛みに呻いているのだろう。

この時代、水練は武術であつた。みなし兇同然に打ち捨てられていた梅丸に、武術の心得はない。だから、水中で不用意に息を吐いてしまうとどうなるかを、すくなくとも体感としてはしていなかった。それを言えば、水没させられる前に息を溜めておくこともしていなかった。

さすがに、水を吸いこめば溺れ死ぬとは分かっている。梅丸は、息を吸いたいという欲求を懸命にこらえた。

せいぜい、ゆつくりと十を数えるか数えないかのうちに、頭がガンガンしてくる。つむっている目の中に赤い光が飛び交い、それも速やかに溶暗していく。

知らず。梅丸の全身に小刻みな痙攣が生じる。

そうして。ごぼごぼと口から大きな泡を吐いて。まさに水を吸いこみかけたとき。

鎖が強く引かれて、梅丸の逆しまの裸身が水面から牛蒡抜きにされた。

「げぶふっ……はあ、はあ」

わずかに飲んだ水を喉奥から霧のごとくに噴いて、梅丸は息をむさぼった。

「言えい。おまえは何故に姉姫なにゆえに化けて、我が地へ乗りこみおった」

「身代りです。姉姫は、家を継ぐ婿を迎える身です。すでに相手も決まっています。人質

に差し出せば、家が潰れます」

いわおき
「磐置国の三男坊か」

梅丸は初めて聞いた。捨てられた畜生腹の子に、一国の大事が明かされるはずもないのだが。その内々で進めてきた話が、敵国に漏れている。つまりは透破すっぱが潜りこんでいるのだろう。それならば、松江姫が身代りだと先に知られていてもおかしくはないはずだが。作者としては、今そこを詮索するのはやめておく。

「それだけならば、姿形の似通った娘を身代りにすれば良からう。おまえは、他に格別の密命を受けておるのであらう」

それならば女乱破を使えば良い。しかし、その理ことわりに良実は思いたらないのか。

「吐け。吐かねば……」

良実が直々に縄束を手にとった。小桶に大樽から水を汲んで、たつぷりと湿した。昨日に辺延野が梅丸を打った乾いた縄束に比べれば、格段に威力が増すであらう。その辺延野は、竹を四つに割いて紙縫りで巻き固めた得物を選んだ。徳川の治世まで下ると箒尻と呼ばれるようになる責具だった。縄束と違って、人を敲くより他の使い道はない。

二人が、逆さ吊りにされている梅丸を挟んで立った。小姓が梅丸の裸身をしっかりとつかむ。

「回せ」

小姓が両手で梅丸の裸身を錐のように回した。良実と辺延野が、両側から梅丸を続けざまに打ち敲く。

ばっしん

ばあん

ばっしん

すばあん

裸身は回転しているので、どこに当たるかは分からない。背中を狙ったつもりが、胸板に括りつけられている石板に当たれば梅丸にとっては幸甚だった。しかし。

ばっしん

「うぎゃあッッ」

揃えた腿の前に曝されている淫囊にでも縄束が当たろうものなら、全身を痙攣させながら悲鳴を絶叫することになる。

悶絶もするのだが、壁の鈎に引っ掛けられていた鎖が緩められて、胸板あたりまで水に浸けられる。まったく気を失っていればそのまま溺れ死ぬだろうが、おぼろにでも気が残っていれば、たちまちにもがき始める。すぐさま引き上げられるが。

すっぱあん

「ぎひいいッッ」

ずばっしん

「ひいいいッッ

前にも増して激しく厳しく打ち敲かれる。

気を失わなくとも、悲鳴が途絶えるだけで水に浸けられる。

八つ裂きだろうと鋸引だろうと、これほどに苦しめられることはあるまいと錯乱したのか、後先を考えられなくなったのか。

「良実様の寝首を掻けと……刃を付けた簪を与えました」

「サチを呼べ」

小姓が責問の間から足早に去って、すぐに侍女を伴って戻ってきた。

松江姫に風呂を勧めて裸にしたとき、簪のたぐいも抜き取っている。それを、サチが披見におよんだ。

「ふん。斯様な細身では、盆の窪を突き通すなぞ無理だな」

それが事実か否かはともかく。良実の目に悪戯っぽい、しかし残酷な光がきらめいた。

それでも、先々まで愉しむ工夫は惜しまない。脇差を抜いて、刀身の平地を^{ひらち}簪の先端に幾度か打ちつけて――それでわずかでも丸まってしまったのだから、真に鋼か怪しいものだが。

「これで突き通せるのは、せいぜいが……」

瓢箪に引っ張られて垂れている梅丸の魔羅を握って鈴口に簪を突き立てた。

「ぎひいいいッ、痛いッ、赦して……ください」

女言葉でなくても、このように慈悲を願うときには丁寧な物言いになる。その証拠に、地声だった。

「松江姫の声を作れと申しつけておるぞ」

小水の道突き破らぬよう魔羅を真つすぐに引きのばして、しかし容赦なく奥まで抉り入れる。

「きやあああつつ、お赦しください」

悲鳴は半ば作ったのだが。女声で痛みを訴えると、なにやら仄かに甘い想いが胸に湧い

た。

「そうか。では、これくらいで赦してやろう」

良実がそう言つたときには、簪は玉を残して魔羅を貫き終えていた。

元より梅丸は鬘も結われず総髪であつたから、女髪を作るのは雑作もなかつた。良実はその髪を十本ばかりもひと息に抜いて、それを使つて簪の玉を雁首を巻く紐に結びつけた。

「ここに当たれば、チンとでも鳴るかな」

まだ責問を続けるつもりだ。

「もう、お赦しください。何もかも白状いたしました。御慈悲ですから、楽に死なせてくださいませ」

「そうはいかん」

梅丸の哀れな願いを、良実は無碍に退けた。

「女とも稚児とも見紛うおまえは、実に痛振り甲斐がある。もそつとは愉しませてくれい」
つまりは。おのれの惨忍な嗜癖の贅にすると云つてゐる。

「では、こうしてみようか」

腰まで水に浸けると良実が命じたが、当塚はすぐに動かなかつた。

「茂兵衛殿。御役目を譲ってください」

辺延野が苦笑して壁際へ動いた。鉤に掛けてある鎖を外して、主君の命を奉行した。当塚も主君の意欲を察して、おのれは相伴に与る態で、割竹ではなく半弓にした。しかし、それは縄束よりも念入りに狙いを定められるのであるから。

「亮威よ、前はまかせたぞ」

上半身を水に浸けているのであれば、くるくると回すのは手間である。ので、小姓は手持無沙汰に、主君の後ろに控えた。

ただ水責にするだけでなく、そこへ敲責を重ねる。危ういときは即座に引き上げられるよう、辺延野は鎖に手を掛けている。梅丸の命を思つてのことではない。主君が新しく手に入れた玩具を壊さないためである。

水に浸けられて、梅丸はこれまでよりも激しく怯えている。外でぶん回されていたときは、まだ相手の挙措がわずかにでも見て取れた。水中では、目隠しされたも同然である。

ぱちんツ

「むぼおツツ」

いきなりに魔羅へ凄まじい衝撃を受けて、分かつてはいても大量に泡を噴いてしまった。これまでとは異なる、凄まじく鋭い劇痛だった。簪が中で暴れて、魔羅を内側からも傷つけたのだ。

ぱっしんツツツ

尻に向かって斜めに振り下ろせる高さになったので、縄束の威力はいや増していた。それでも、魔羅を打たれるよりは耐えやすい痛みでしかない。

ぱちんツツ

ぱっしんツツツ

交互に、あるいは同時に前後を敲かれて。わずか数発で息が続かなくなり、あわやのところで引き上げられた。しかし、息をわずかに食っただけでまたしても沈められて。その次は、引き上げられると同時に、滝のごとく水を吐き出した。肺腑にも吸いこんだのだろ

う。激しく咳きこんで飛沫を撒き散らした。

この責めは、梅丸が咳こまなくなるまで続けられた。

つまり、半死半生どころか九死一生まで追いこまれて。それでようやく赦されたのだ。赦されるといっても、手当などされなかった。さすがに逆さ吊りで放置するのは拙かろうと、両手の縄を解かれて頭上で縛り直され、両腕で滑車から吊るされたのだった。

亀頭と淫囊に提げられた瓢箪も、鈴口に突き立てられた簪も、そのまま残されて。梅丸は午過ぎまで氣を失ったままだった。

※続きは製品版でお楽しみください。